

『旧栗山家主屋』が 今の場所に**移**るまで

旧栗山家主屋(目黒区指定文化財、以下古民家)は、江戸時代に「年寄」という役職を代々務めた旧衾村の栗山家の主屋を、風光明媚な竹林に囲まれた「すずめのお宿緑地公園」内に移築復元したものです。ここでは目黒区古民家が現在の場所に移るまで、「解体」、「復元」、「開館」の3つにわけて紹介いたします。



ヤナカ竹・木舞の撤去、解体の様子
(昭和54年8月4日撮影)

解 体

古民家は昭和54年に目黒区指定有形文化財(建造物)にしていされ、同年の7月9日から8月13日に解体工事を行いました。

解体前に指定有形文化財への登録を目的として、昭和53年に早稲田大学建築史研究室による調査が行われました。現在の古民家は、この時の調査結果をもとに復元されています。

古民家の解体は7月9日より行われましたが、実際に解体工事に着手したのは同17日からです。解体作業は復元のための調査と並行して行われ、初日は東側下屋の取り壊しと、建具の調査が行われました。8月に入り、茅落としを行い、屋根部分の解体を行いました。左の写真はその内の1枚です。その後、台所や広間、土間などの解体をし、最後に資材の運び出しと解体用資材の搬出を行って、解体工事が完了しました。

この解体工事で出た梁などの建築資材については、復元の際にほぼ全て、元の用途で再利用されました。

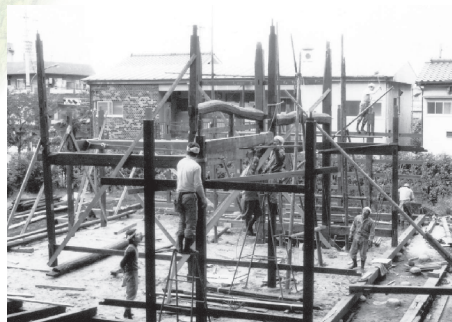
復 元

古民家の復元工事は昭和58年5月23日に始まりました。最初は解体した柱や梁などの主要な部材の腐食部を精査し、保存処理を行いました。また、敷地内にあった樹木のうち、基礎工事の際にやむを得ず伐採したケヤキについては、テーブルと衝立に加工しました。

基礎工事が完了した後、土台・柱光付けし、図面をもとに柱や梁などを組上げる「建方」を行います。建方を終えると、屋根全体の力を受ける竹の垂木を組む「垂木組」、屋根の「よしず張り」、さらに屋根上に「小屋組み」をして、銅板を張る下地を作りました。

銅板を張る位置を割りつけるため、防水フェルトを張り寸法を測りました。その後寸法に合わせて銅板の型紙を作り、型紙に合わせて銅板を加工しました。さらに加工した銅板を、上の銅板が下の銅板にかぶるよう張っていきました。そして土壁の下地となる「木舞」を組んで壁土を作り、荒壁塗りと中塗りの2回で土壁を作り、外装を整えました。

外装を整えた後に「床板張り」と建具の設置を行い、土間にかまどを設置し内装を整え、冠木門や保安装置、前庭の整備を行って、復元工事は完成しました。



土台上に柱を建て、天井梁を据える様子
(昭和58年撮影)

開 館

古民家の復元工事は、降雪による遅れも心配されましたが、予定通り昭和59年3月31日に完成しました。その後4月19日、桜が満開となる中で落成式が執り行われました。

古民家では開館以来、年中行事の開催などを通し、年間約11000の方が訪れる、区内有数の観光施設として親しまれています。



落成式当日の古民家と桜(昭和59年4月19日撮影)

移設前の目黒区古民家

移設前の古民家は、現在の目黒区緑が丘1丁目にありました。当時は「茅葺」の屋根でしたが、移設の際に消防法の規制により、「茅葺型銅板葺」となりました。



古民家年中行事(七夕)の様子
(令和5年撮影)



移設前の古民家(昭和54年撮影)